

「さくら色」について

Sakura Color

被服学科
Dept. of Clothing

美谷 千鶴
Chizu Mitani

増子 富美
Fumi Masuko

抄 録 本研究室ではこれまで、桜を用いて絹布などを「さくら色」に染める染色条件、方法などを検討してきた。最近、桜染色は注目されているが、まず、「さくら色」という語（表現）とその内容（概念）とについて、万葉集や源氏物語などを、主として、文献による調査を試みた。以下のように、その結果をまとめた。1. 単色としての桜色の「桜色」という表現（言葉）は、平安朝時代以降は確かに存在し、その語は文学的修辭として複雑に使われている。2. 同時に「桜色」は、単色ではない、襲の色目の名としての「桜」や織物の「桜」という表現としても平安朝時代には使われていた。3. 「桜色」という言葉は「万葉集」の時代にはなかったと推察される。

キーワード：桜染色、桜色、襲の色目、万葉集

Abstract In our laboratory, we have so far concentrated on dyeing “Sakura Color”, and have studied the dyeing methods and conditions for dyeing with this color. While studying this dyeing process, we become aware of some problems regarding the expression, “Sakura Color” itself and the concept of “Sakura Color”, and decided to investigate their use in two words of classical Japanese literature, name “Manyoshu” and “Genji monogatari”. The following are results of our investigation. 1. The expression, “Sakura Color”, as a single color existed after the Heian era and the word was used as literary expression in a complex way. 2. At the same time, “Sakura Color” was used in the Heian era as a subtle color made from layers of colors within the “Sakura” spectrum. 3. It is thought that the word “Sakura Color” did not exist in the era when “Manyoshu” was writing.

Keywords : cherry dyeing, Sakura Color, layers of colors, Manyoshu

本研究室ではこれまで、桜染色で「さくら色」に染めるという事にこだわり、その染色条件や方法を検討してきた。その染色を試みているうちに「さくら色」という語（表現）とその内容（概念）とについて、やや疑問が生じたので古代の文献から検討してみた。

『岩波古語辞典補訂版』によれば、「さくら」が色彩に関わる語として使用される場合としては「襲（かさね）の色目の名、「襲の御直衣（なおい）」「源氏薄雲」とある。「色」の名として使われる場合は挙げていない。「さくら色」という熟語も挙げていない。『広辞苑第4版』を検索してみると、親

項目「さくら」の解として「②桜色の略」と示し、熟語（追込み項目）として「桜色」を挙げ、その解として、「桜の花のような色。淡紅色「ほんのり桜色に上気する」」とあるが、用例の出典は示していない。

『岩波古語辞典』が、「さくら」の熟語として「さくら色」を挙げていないのは、現代語の場合と同じであって、「古語」として特にあげる必要はないとの立場からであろうか。それとも「古典」には「さくら色」という語は見られないという意味なのであろうか。色としての「桜色」という語は比較的新しい語であって、桜の花がもてはやされ、「花の王」であるとされた平安朝期に色の概念としての「桜」、

もしくは「桜色」が認識されていたかを源氏物語を中心に調べてみた。

『源氏物語』の場合をその用語索引¹⁾によって検索してみると、色彩に関しての「さくら」の語のその用例は10例挙げることができる。「さくらがさね」は2例、「さくらいろ」は1例を挙げることが出来る。全ての用例を示す必要もないと思われるので、若干問題ありと思われる例のみを以下に挙げてみる。

(1)「かのしるしの扇は桜の三重がさねにて、濃き方に霞める月をかきて水をうつしたる心ばへ」〈対校源氏物語 花宴316頁〉となっているが、別本(青表紙本)では「かのしるしの扇は、桜がさねにて(後略)」²⁾となっていて、「桜がさね」については「檜扇の様式の一」と頭注が付せらせているだけである。「対校源氏物語巻一」の頭注では「桜の三重がさね」について「檜扇の両方の親骨の所を檜の薄板を三枚重ねてその上を桜の薄様で包んだもの(中略)桜の薄様は表白裏蘇芳。」と説明されている。「桜」は紙の重ね方についていったものとされている。

(2)「濃き薄きすぎすぎに、あまたかさなりたるけぢめ花やかに、冊子のつまのやうに見えて桜の織物の細長なるべし」〈対校源氏物語 若菜上382頁〉

(3)「紅に桜の織物の桂かさねて」〈対校源氏物語 手習303頁〉

(2), (3)の例は、それぞれ「桜の織物」と「桜の」が「織物」を修飾する形となっている。すなわち、織物であるから織糸の経緯、たて糸とよ糸の色によって色彩効果を出すようにするのであるから、この場合「桜の」という修飾語は経緯の色目を言っているとみてよいのではないか。山崎青樹氏³⁾は草木染事典の中で「紅花または蘇芳で染めた経糸と生絹と呼ばれる生糸の色の白い緯糸で織り上げたものである。」と述べられている。襲の場合と全く違った色彩効果が表れるように思う。

「さくらいろ」については次の1例のみが挙げら

れる。

(4)「さやかならねど、つくづくと見れば、桜色のあやめもそれと見分きつ。」〈対校源氏物語 竹河401頁〉

池田亀鑑氏の該当部分についての頭注を参考に口語訳をすると「夕霞に隔てられてははっきり見えないが、よくよく見れば、桜襲を着たのが大君であると区別出来た。」⁴⁾とあり、その場に山吹襲を着ている女性と「桜の細長」を着た女性とが居て、二人の人物の識別を容姿によらず、その着衣の「色」によってかろうじて出来たというのである。従ってどうしてもここは「桜色」(色としての概念)であり、そしてその色は着ている桜襲の色彩ではなくてはならず、それは現在の私たちがイメージする「桜色」=淡紅色であると思われる。

『源氏物語』中の「さくら」(色に関するもの)は、以上に挙げた4例以外は全て服飾に関しての「襲の色目の名」と解してよいものであった。そして、今回は『源氏物語』のみを取り上げたが、同様の用例は王朝期の他の文学作品にも沢山見られる。孫引きではあるが、『古事類苑』の「服飾部」に挙げられた「さくら色」の1例である。次に示す。

(5)「六宮くれなるのかいねりのいとこきひとかさねさくらいろのおなじなをしさしぬき、えびぞめの下がさね奉りて…(下略)」⁵⁾〈空穂物語 蔵開上: 圈点原本〉

次に、『新編国歌大観 第一巻勅撰集編』⁶⁾によって採られた「さくら色」の用例を全て挙げておく。例示の順序は、所収歌集の成立の順序に従った。表記は『新編国歌大観 歌集編』の表記どおりとした。

(6) きのありとも
さくらいろに衣はふかくそめてきむ花のちりな
むのちのかたみに

古今集・巻一・春上 66番

(7) さくらの散るを見て よみ人しらず
桜色にきたる衣のふかければすぐる春日もをし
けくもなし

後撰集・卷三・春下 134 番

続千載集・卷十六・雑 1681 番

- (8) 題しらず よみ人しらず
さくら色にわが身は深く成りぬらん心にしめて
花ををしめば

拾遺集・卷一・春 53 番

- (17) 建仁元年五十首歌奉りける時 前中納言定家
桜色の袖もひとへにかはるまで移りにけりな過
ぐる月日は

続後拾遺集・卷三・夏 155 番

- (9) 題不知 読人不知
さくら色に我がみのうちは成りぬらん心にしみ
て花をしのべば

拾遺抄・卷一・春 33 番

- (18) 式子内親王
桜いろのころもにもまたわかるるに春をのこせ
るやどの藤波

風雅集・卷四・夏 304 番

- (10) 四月ついたちの日よめる 和泉式部
さくらいろにそめしころもをぬぎかへて山ほと
とぎず今日よりぞまつ

後拾遺集・卷三・夏 165 番

- (19) 百首御歌の中に更衣を 後二条院御歌
さくらいろのころもはうへにかふれども心に春
をわすれぬものを

風雅集・卷四・夏 305 番

- (11) 千五百番歌合に 藤原定家朝臣
桜いろの庭の春かぜ跡もなし問はばぞ人の雪と
だに見む

新古今集・卷二・春下 134 番

- (20) 守覚法親王家五十首歌に旅 大蔵卿有家
桜色に春たちそめし旅衣けふ宮城野の萩が花ずり

新拾遺集・卷九・羈旅 786 番

- (12) 入道太政大臣
さくらいろのはつはなぞめのかり衣きつつやな
れんはるのこのもと

続古今集・春上 96 番

- (21) 題しらず 津守国夏
桜色もわがそめうつすから衣花はとめけるかた
みだになし

新後拾遺集・卷二・春下 125 番

- (13) 祝部忠成
さくら色にうつろう雲のかたみまで猶あともな
き春風ぞふく

続拾遺集・卷七・雑・春 520 番

- (14) 「暮山花といへる心」を 従二位成美
さくら色の雲のはたての山風に花のにしきのぬ
きやみだれん

続拾遺集・卷二・春下 99 番

- (15) 前大納言忠良
桜色の花のたもとをたちかへてふたたび春のな
ごりをぞ思ふ

玉葉集・卷三・夏歌 295 番

- (16) 藤原忠成朝臣
桜色に山分衣うつろひぬかつちりかかる花の下道

以上 16 首にその例は見られる。いずれも初句と
して、連体修飾語、あるいは連用修飾語として機能
している。

まず、(6)、(7)、(8)、(10) などの「さくら色」
は「さくら色の衣」を意味している。そしてそれは
具体的には「桜の織物」であり、「桜襲」の衣なの
である。それらを包み込んで、いわば抽象化して
「さくら色」が使われているのだといえる。「衣」で
あるから歌として縁語の「裁つ」、「染む」がおのず
から使われ、「立つ」「占む」などの掛詞となり、一
首を深く、重層的な趣きあるものとする。

「さくら色」が「衣」をいうのであるとは前に述
べた。次には、その「さくら色」は春という季節を
象徴的に表すことを言わなくてはならない。春服を
まとった春の季節をいうのである。そこから惜春の
情、懐かしい春の季節に別れ、それを惜しみ哀しむ
情を訴えるのである。「さくら色」の「衣」をまと
った「春の季節」が移り過ぎて行き、「萩」の季節

になったと、(20)の用例は歌い、過ぎ去った月日をいとおしむのは(17)の用例である。

ついで、「風」や「雲」の修飾語となっている例を挙げる。用例(11)は新古今集の藤原定家の歌である。いわゆる新古今調の難解さを持つ歌である。

「桜の花びらで桜色に見えた庭の春風が今日は跡形もない。地上の散り敷くその花びらを、ヒトがもし訪ねてきたならば、雪と見ることであろう。一中略— 昨日の春風を「桜色」とした上句の感覚の生かし方は非凡である。」⁷⁾「桜色の」は連体修飾語としてすぐ下の「庭」を修飾するかのようにみえるが、実はそのすぐ下の「春風」にかかっていると解釈して、桜の花びらを載せて吹く桜色の風なのであると考える。文学的に手のこんだ修辞であると思う。

用例(14)の「さくら色の雲」はそのまま夕焼け空に浮かぶ雲の色を「桜の花びらのような色」すなわち「さくら色」と表現したのであろうか。両歌共に「さくら色」は実際の、現実的な表現であるのに、なぜか幻想的な美しさを喚起するのは、「さくら色」という語のせいなのだろうか。「さくら色」という言葉は、現在の私達が感ずる以上に感覚的にシャープな表現であったのではないだろうか。それはもしかしたら「歌語」であったのではないかと考えるのも一案ではないか。

「色」を言葉として正確に伝えることは、考えてみるとなかなか困難なことである。日本語では「色」の多くは、自然界の動植物や鉱物の具体的な色を比喩的に用いて表現するのであるが、それが比喩であるからして言葉としての普遍性、永続性を獲得するのは案外に難しい事ではないかと思われる。「トキ色」という言葉がある。年輩の人に聞くとすぐにわかるといわれるが、トキという鳥が絶滅危惧種となっている昨今、現代の若い世代にはどのような色かすぐに、また的確にイメージできるであろうか。疑問である。

その点「桜色」なる語は、少なくとも平安朝時代以降は、その普遍性、永続性は保持し続けていると

思うが、『万葉集』の時代には、その言葉「さくら色」はなかったのではないかと思われる。『万葉集』についていえば、『新編国歌大観 第二巻私撰歌集編』を検索してみると、「さくらのはな」、「さくらはな」という詞句の見られる歌は全部で32首あるが、「さくらいろ」という詞句を含む歌は全く見られぬことにも注意しておきたい。すなわち、「さくら色」という言葉は『万葉集』の時代には顕在化せず、桜の花が「花の王」としてもてはやされ、珍重せられた王朝期に入ってから言葉として存在したといっていよう。

以上、今回の調査の結果を以下のようにまとめた。

1. 単色としての桜色の「桜色」という表現(言葉)は、平安朝時代以降は確かに存在し、その語は文学的修辞として複雑に使われている。
2. 同時に「桜色」は、単色ではない、襲の色目の名としての「桜」や織物の「桜」という表現としても平安朝時代には使われていた。
3. 「桜色」という言葉は「万葉集」の時代にはなかったと推察される。

参考文献

- 1) 吉沢義則・木之下正雄：対校源氏物語新釈用語索引，平凡社，東京（1952）
- 2) 朝日新聞社編：日本古典全書源氏物語 池田亀鑑校註，朝日新聞社，東京，1巻，402（1946）
- 3) 山崎青樹：草木染の事典，東京堂出版，東京，128（1981）
- 4) 朝日新聞社編：日本古典全書源氏物語 池田亀鑑校註，朝日新聞社，東京，5巻，180（1946）
- 5) 神宮司庁：古事類苑服飾部六，吉川弘文館，東京，312（1979）
- 6) 「新編国歌大観」編集委員会編：新編国歌大観，角川書店，東京（1983）
- 7) 峯村文人：新編日本古典文学全集 43 新古今和歌集，小学館，東京，58（1995）